

「ライフデザイン研究」の20年



第一生命経済研究所 常務取締役 ライフデザイン研究本部長
江崎 正志

この9月にライフデザイン研究本部は、前身のライフデザイン研究所の設立から数えて20年の節目を迎えることができました。これもライフデザインレポートの読者の方々をはじめ、多くの皆さまの温かいご支援によるものと深く感謝しております。

今後も研究員一人ひとりがこれまで以上に質の高い研究に努め、情報発信力に磨きをかけていきたいと思っております。皆さまの一層のご指導とご協力をお願い申し上げます。

*

20年前の1988年9月1日、第一生命創立85周年記念事業の一環として、「ライフデザイン研究所」が設立された。世はまさにバブル経済の真っ只中、現在定年を迎えている団塊世代が40歳代に突入、竹下内閣の下で翌年4月導入の消費税の議論が盛んに行われていた時期であった。

ライフデザイン研究所の設立趣旨は、「生活産業として位置づけられる生命保険事業の将来を展望するために必要な情報収集活動を行う。また、お客さまがそれぞれのライフステージにおいて避けることのできない『教育』『住宅』『健康』『老後』等の生活設計上の諸問題に関して、有益なアドバイスを提供するために必要なノウハウの収集蓄積と開発に取り組んでいく。そのために新会社を設立し、国民生活のありかたに関する専門的な研究開発を行い、そこで得た成果を様々な媒介を通じて社会に浸透させていく」ということであった。

当時を振り返ると、ライフデザイン研究所は旧第一生命館のたしか4階、研究員5～6名という小さな所帯でスタートしたが、テーマのとりあげ方の斬新さ、分析手法

の手堅さ、自由な意見交換、思い切った提言等により、小さいながらも注目すべき仕事を続けてきた。こうして設立されてから3年、91年には研究成果をとりまとめた情報誌「LDIレポート」を公刊することとなった。のちに「ライフデザインレポート」に改題され、今号が通巻第187号にあたる。

また、同年4月からは、研究活動と並ぶもう一つの柱として、企業・団体向けに、従業員の方々の定年後の生涯設計を支援するセカンドライフセミナーの開発を進め、「ライフデザインプログラム『洋洋人生のススメ』」を始めた。このセミナーは、第一生命が持つ生活設計に関するノウハウと生活研究所としての調査研究結果を活かして、タイムデザイン、マネーデザイン、ヘルスデザインの3部構成、一泊二日を標準コースとしており、ご夫婦で参加される方々も多い。

2002年10月1日、ライフデザイン研究所は第一生命経済研究所(1997年4月設立)と統合することになったが、研究所が設立されてから20年、「ライフデザイン」という言葉、あるいは考え方は広く普及し、多くの人々が意識するようになった。

しかし、この20年間でこれまで理想とされた画一的、同質的なライフスタイルが崩れ、人々が将来にわたっての生活設計をたてることが難しくなってきた。一流の大学に入り、大企業に就職しても、生涯その会社に勤められるか分からない。伝統的な性別役割意識や結婚観、家族観も変わりつつある。公的年金も健康保険も将来どれだけの年金・給付が受けられるかはっきりとは分からない。青少年による犯罪(学級崩壊・キレル子ども)が増える一方で、年少の子どもたちが犯罪(児童虐待・出会い系サイト)に巻き込まれるような荒れた社会になってきている。これまではこうしたことに備える方法、癒す場として、家庭や学校、地域、職場といった絆や繋がりがあり、企業の福利厚生制度や社会保障制度もあった。しかし、これからはこれまでに増して自分自身で考え、行動していくことになる。

「デザイン」とは、もともと designare (記号に表す) というラテン語で、「頭の中にある考えを、主体的かつ能動的に、具体的な形にして描く」という意味で使われる。

「ライフデザイン」とは、「自己の価値観に沿った人生を、自ら積極的に創造し、実現させていく」という意味である。そのためには個々人が世の中の変化を的確にとらえていくことが重要であり、私たちの研究成果が今後もその一助になれば幸いである。

さて、今月のレポートは鈴木前主席研究員の「社会関係資源と地域生活」と宮木副主任研究員の「職場のインフォーマルコミュニケーションとメール」である。いずれも地域や職場における満足度や人間関係といった生活の質(QOL)に焦点をあてた研究であるが、女性がワーキングマザーとして地域から職場へ、定年を迎えた団塊世代が職場から地域へと重心を移しつつある今日、時宜を得た論文であり、是非ご一読いただきたい。